

## ヒラメの生態と漁獲状況について

長崎県総合水産試験場

漁業資源部 海洋資源科

### はじめに

ヒラメは千島、樺太、北海道から九州に至る本邦沿岸各地及び朝鮮、東シナ海にわたって極めて広く分布している魚です。

長崎県沿岸においても対馬から有明海まで広く分布し、「長崎県のさかな」12種にもあげられるほど親しまれています。

ヒラメは高級魚で、重要な水産資源の一つとなっており、長崎県では主に秋～冬に刺網、小型底曳、釣り、定置などで漁獲されます。

それでは、ヒラメの分布・生態と漁獲状況についてご紹介します。

### 分布・生態

先にお話したように、ヒラメは日本全国に広く分布していますが、ふ化後のヒラメ稚魚は30から40日間浮遊生活をおくったのち、30m以浅の砂底域に着底します。その後は成長するに従い深みへ移動し、成魚になると産卵・索餌・越冬にあわせた季節的な深浅移動とともに、かなり広域的な移動を行うと考えられています。なお、長崎県では、平成元年から4年に標識放流調査を実施しました。この調査で、福岡県や鹿児島県での再捕もみられ、九州西から北部海域ではかなり活発な交流があることが分かりました。

ヒラメは稚魚から幼魚期には小型の甲殻類(エビ、カニの仲間)を主に食べますが、成長するに伴い小魚を主体にエビ類、アミ類、シャコ類、イカ類、貝類などを食べるようになります。

成長をみると、図1にありますように、1才までは雌雄で成長の差はみられませんが、2才以降は雄に比べ雌の成長が速く、重量比でみると、3才で約1.5倍、5才で約2倍の大きさになります。

長崎県沿岸におけるヒラメの産卵期は1～5月にわたり、その盛期は2～3月です。

産卵は2才魚では一部が行い、3才以上は全て

が産卵するようになります。寿命は12年程度と考えられています。

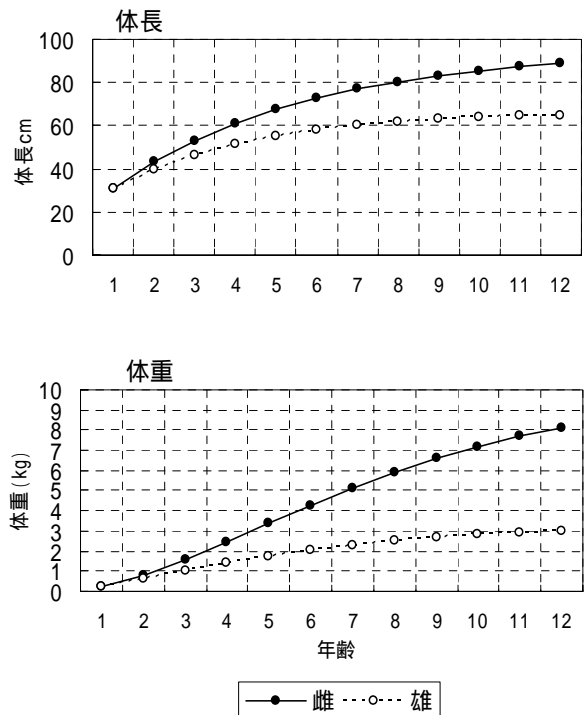


図1 ヒラメの成長

### 漁獲状況

長崎県沿岸域におけるヒラメの漁業種類別漁獲量の推移を図2に示しました。長崎県沿岸では主に刺網、釣り、小型底曳網及び定置網で漁獲されます。

ヒラメの漁獲量は、昭和40年代前半には50トンを下回る低い漁獲水準でしたが、46年頃から漁獲が急増し、51年には約500トンとなりました。その後は57年までほぼ横這い傾向で推移しましたが、58年には再び急増し、59年には700トンと過去最高を記録しました。しかし、その後は急激に減少し、63年には57年以前の水準となり、以後横這い傾向で推移しています。また、50年頃までは釣りによる漁獲が主体でしたが、その

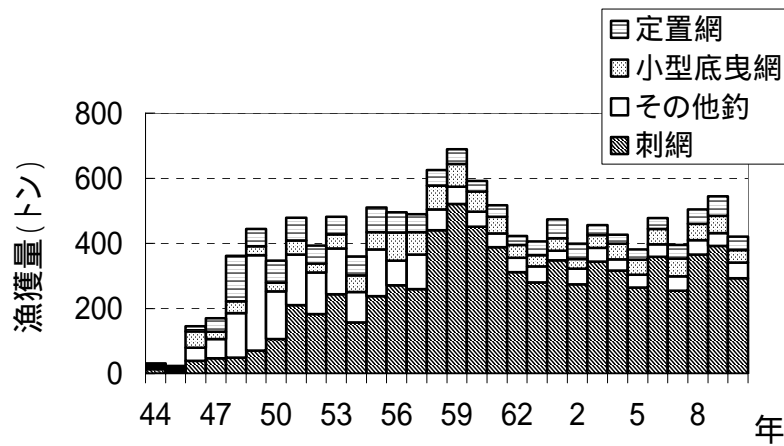


図2 長崎県におけるヒラメ漁獲量の推移

後は刺網による漁獲が主体となっています。先の漁獲変動は刺網による漁獲が反映されたもので、刺網による沖合漁場の開拓の結果を示していると考えられます。

また、ヒラメの主漁期は、12月から翌年の4月までで、生態のところでお話ししましたように、この時期の漁獲のほとんどは産卵のために本県沿岸に来遊した産卵親魚です。

### 最後に

ところで、本県のヒラメ漁獲量は昭和63年以降横這い傾向であることは、先にお話ししましたが、日本海西部から東シナ海域における現在のヒラメの資源状態は低水準で、減少傾向にあり、資源は悪い状況にあると判断されています。

長崎県では、漁業者の代表者や有識者等から構成される長崎県資源管理型漁業推進協議会が、効果的な資源管理を行うための具体的な方策として、体長制限(25cm以下のヒラメの再放流)、

刺網の網目拡大(5.5寸への拡大)、種苗の放流(80万尾以上)、漁獲努力の削減の4つを想定した「長崎県資源管理指針」を平成4年に策定しました。この指針に基づき、平成6年からは刺網の網目拡大を除く3つを骨子とした長崎県資源管理計画が長崎県漁業資源管理実践協議会(漁連事務局)を中心に実践されているところです。

今のところ漁獲量の増加には至っていませんが、ヒラメ資源の回復増大を図るためには、上記取り組みの継続実施とより一層の啓発普及が必要と考えられます。一人一人ができることはほんのわずかかもしれませんが、「塵も積もれば山となる」精神で皆様が資源管理に取り組めば、必ず実を結ぶに違いありません。

(担当 山本憲一)